

和泉式部集宸翰本の再検討

― 正集との比較から ―

岸 本 理 恵

一、はじめに

和泉式部の家集といえば、先ず第一に和泉式部正集・続集(以下それぞれ「正集」「続集」と略す)の系統を想起しがちであるが、和泉式部の家集には宸翰本和泉式部集(以下「宸翰本」と略す)と呼ばれる系統のものがある。京都大学附属図書館所蔵の本には「後土御門院」とする極札があり、この鑑定の真偽はさておき書写年時は室町中期頃と考えられる。また、江戸後期の写本である無窮会文庫所蔵の本には「後醍醐天皇宸筆」と添えられている¹⁾。所収の歌数は一五〇首で、正集の所収歌数が榊原本で八九三首、続集が六四七首であるのと比較すると、五分の程の少なさである。その上、勅撰集との重出歌が多く、そうでない歌もほとんどが正集・続集に見えるので、勅撰集や正集・続集からの抜粹本であるとの評価がなされた。このため

宸翰本が重視されることは少なく、翻刻や影印、論文なども多くない。

それでも、宸翰本の構成についてS1~80の前半とS81~150の後半では成立事情に違いのあることが既に指摘されている²⁾。つまり、勅撰集との重出状況の点から宸翰本を見ると、S80とS81を境に全く異なるのである。(宸翰本と正集・続集および勅撰集の重出については本稿の末尾に一覧表を付した。適宜参照されたい。)

S81以下の部分は『後拾遺集』から『新古今集』の勅撰集に見える歌ばかりで、しかも重出する各勅撰集ごとにまとめられ、各勅撰集内の配列に従っているのである³⁾。S80までの前半も勅撰集入集歌は多いものの、そのような規則性は見出せない。こうした性質の違いに加え、宸翰本一五〇首の内には重複する歌がないことから、S1~80の前半が先に成立し、その後これにない歌を『後拾遺集』から『新古今

集』の勅撰集より増補したのがS 81以下の後半部分であると考
えられているのである。

この、先に成立していたと考えられる前半部分はその後、正
集との本文を比較した結果、正集との重出歌は多いものの現存
正集と直接は関係がないとされた。しかし、久保木寿子氏によ
りS 41-66に関しては正集のいわゆるE3歌群（正集616-833）と
の緊密さが指摘される。⁽⁴⁾ また、宸翰本前半部はS 1-40の歌
もほとんどが正集に見える歌なのである。つまり、宸翰本前半
部八十首のうち六十六首が正集に見える歌であるのに、正集と
は別資料によると結論づけられたため、この事実にはあまり留
意されてこなかった。しかし、正集と宸翰本の重出は果たして
偶然の一致による無関係なものなのであろうか。もう一度正集
との比較、宸翰本前半部の構造を検討することから、その点に
ついて考えてみたい。

二、宸翰本の構成と正集の歌（一）

まず、宸翰本の歌序とは前後するが、既に正集との緊密さに
ついて指摘のあるS 41-66について見てみよう。宸翰本のこの
箇所は正集E3歌群に見えない歌を八首含むものの、これを除け
ばその進行順序が正集E3歌群と一致し、しかも、宸翰本と正集

E3歌群の詞書は、内容や表現が近い場合が多い。例えば、

人かたらひたるおとこの方より、わするなどのみい、おこ
すれば (S 42)

こころかはりたるをとこの、まくらしばしおもひかはるな
となんいふに (正 211)

人かたらひたる男のもとより、わするなどのみいひをこす
れば (正 619 (E3))

このように、正集・統集内の二箇所以上に重出する場合でも正
集E3歌群の方により近いものが多いのである。また、同じ歌が
正集・統集以外の歌集に見える場合も、例えば和泉式部の秀歌
として有名な「つづくにのこやともひとをいふべきにひまこそ
なければしの八重ぶき」の歌の詞書は、

わりなくうらむる人に (S 57)

わりなくうらむる人に (正 690)

題不知 (後拾遺集・691)

人にもいのひはべりて、まさひらのうちにある人のいみじ
うおもひしのびけるころ、しのびたる人の、ひまあらばい
かでといひたりければ (麗花集・恋上・87)

とあり、やはり正集E3歌群と一致するのである。全ての詞書が
完全に一致するわけではないが、表現に多少の違いがあっても

詠歌事情に違いの生じるようなものはない。久保木氏はこのことから「宸翰本④⑤は歌序、本文共に、E3歌群に近い資料に忠実に従っているものと思われる」とされ、さらに宸翰本のこの箇所には見えるが現存E3歌群に見えない八首についても「現存のE3歌群に類似した、それよりもやや歌数の多い歌群の存在を想定し、宸翰本④⑤はそれに依拠したものとする方が妥当であろう」と結論付けられた。

確かに、歌序と本文の共通性から見ると正集E3歌群との資料の共通性は疑いようがない。すると正集E3歌群にない八首も久保木氏の指摘のように考えるのが良さそうではあるが、この点について、一首ずつ順に見てみたい。S41は

たのめたるおとこを、いまや／＼と待けるに、前なる
竹の葉にあられのふりかかるとをき、て

竹の葉にあられふるよはさら／＼にひとりはぬべき心ちこそせぬ

である。続集330にも見えるが、「十二月、人のもとよりよみにをこせたりし、雪」との詞書をもつ続集325からの一連の歌群に属し「雹」を題とする歌であり、続集330との密接な関係は見てとれない。S41以下が正集E3歌群と進行順を同じくする規則に従えば、次のS42が正集619にあたるので正集ではこれ以前にS

41と同じ歌が存在したことになるが、現存正集からは不明としか言えない。ただし、「詞花集」二五四番にも重出し、これとはほぼ同文の詞書をもつ。

次にS46は正集152にも見えるがE3歌群内ではない。S46には詞書がなくS45と「世のなかさしがしきころ」との詞書を共有するが、『後拾遺集』でもS45と「世の中つねなくはべりけることよめる」との詞書を共有して重出することから、S45に関連して『後拾遺集』からの採歌であるとの指摘もある。ただし、宸翰本が採歌したE3歌群との関連ある資料になかったかどうかは不明である。⁵⁾

次に、S49に注目したい。正集184・続集232・436に重出し、いずれの詞書も宸翰本の詞書「よの中いたくさはがしきころ、とはぬ人に」と内容はほぼ同じである。これらのいずれかからの採歌と考えることも可能性としてはありうるが、正集E3歌群との歌序の一致を前提としてもう少し正集を見てみると、次のことに気がつく。

この歌が本来E3歌群にあったと仮定してみよう。S49の一首前であるS48が正集651に一致し、一首後のS50が正集654に一致する。宸翰本とE3歌群はその歌序が一致することから、この時S49は正集651～654間に位置する、すなわち、

S 48 (||正651)・S 49・S 50 (||正654)

ということになる。もちろん現存正集E3歌群には諸本いずれにもこの歌はない。しかし、正集榊原本にはこの箇所にあたる正652・653間に「本ノマ、」と注記する一行がある。正集榊原本を翻刻した『私家集大成 中古II』(和泉式部工)がこれを、「一首分脱落ノ意カ」とするよう、これは何らかの脱落を示しているのではないか。榊原本と同じ系統の彰考館甲本にも同じ箇所652に空白の一行を入れている。そうすると、この正集の注記が示すように現存正集はここに断絶があり、ここから一首または数首の歌が脱落して、その中に歌にS 49と一致する歌があったと考えられないだろうか。

次に、S 51～54を見よう。四首まとまって正集E3歌群には見えない。正集・続集や『後拾遺集』等と同じ歌が重出するものもあるが四首まとまっては見えない。S 54は『古今和歌六帖』二八六五に類歌と思しき歌は載るが、詞書等はなく出典未詳である。ここもやはり正集E3歌群の歌序と比較して見てみよう。

宸翰本においてこの前後の歌と正集E3歌群を対照すると、

S 50 (||正654)・S 51～54・S 55 (||正677)

となる。正集において正654～677間に「本ノマ、」等の注記は残念ながら見えない。

しかし、気になる点がある。正集664～676は和泉国下向の歌群とされるものであるが、そう判断されるのは、詞書に「あしおほくつみあげたる舟にいきあひて」(正666)等とあつて旅のものであると判断されることや、歌群中の正集672が『後拾遺集』に入集して「いづみにくだりはべりけるに、よるみやこどりのほのかになきければよみ侍りける」(五〇九番)との詞書もつからである。正集において歌群の始めである正664の詞書は「ながらのはしをみて」と記すのみでやや唐突な歌群の始まりであり、和泉国への下向かどうかははっきりしないものである。あるいは和泉国への下向の歌群は本来この前にまだ続きがあることも想定できる。また、阿部氏も指摘されるが、正集において歌群の末にあたると思われる正676は「又」との詞書で前歌から続くのだが、同じ歌が『詞花集』には「帥前内大臣」つまり藤原伊周の歌として入集する。いずれの集が正しいかとの判断はともかく、正集のこの箇所には本文の乱れを認めることができよう。やはり、正集E3歌群と関係の深いS 51～54が存在したと思しき正集の箇所に、本文の乱れが確認できるのである。

次に、S 61はどうであろうか。前後を正集の歌序と対照すると、

S 60 (||正723)・S 61・S 62 (||正744)

となる。正集723―744間にもやはり「本ノマ、」との注記はないが、気に留まるのは、

すさのをのみことをいのるともなきにいとどしくひさしか
るべきとこの上かな (正729)

である。五・七・五・七・七の音律に反し、理解し難い歌である。これについて『和泉式部集全釈』⁽⁸⁾が「この歌は旋頭歌の如き形態を取るが、おそらくは二首の歌が誤って記され、その折にそれぞれの第三句が重複したものであらう(村上説)。中古には旋頭歌はめつたによまれなかつたし、和泉が旋頭歌体のものを他によんだ形跡もない」とするように、本文の乱れを認めることができる。S 61が入ると思われる箇所にも、やはり正集の本文上の問題がある。

以上のように、宸翰本と密接な関係が認められながらも現存正集E3歌群には見えない五箇所(八首)のうち三箇所については、それらの歌が位置すると想定される正集の箇所が正集本文の乱れの認められる箇所にあたる。これら八首を含めた宸翰本と正集E3歌群の関係は、歌序と詞書内容の一致から導かれる妥当性に留まらない。正集本文の側からも資料の同一性が確認できるものである。さらに付け加えれば、S 48を挙げることができる。これは正集65にも見え、『後拾遺集』六七九番にも

次のように入集する。

をこのまでといひおこせて侍りけるかへりごとによ

み侍ける 相摸

たのむるにたのむべきにはあらねどもまつとはなくてまた

れもやせん (後拾遺集・678)

ときどきものいふをとこ、くれゆくばかりなどいひて

はべりければよめる

ながめつつことありがほにくらしてもかならずゆめにみえ

ばこそあらめ (後拾遺集・679)

『後拾遺集』ではこの六七九番歌に作者名表記がないため、一首前の六七八番歌と同一作者、つまり相模の歌として認識されるものとなっている。しかも、この歌を引用する『後六六撰』や『定家八代抄』が作者を相模とすることから、現存『後拾遺集』が後世に転写を繰り返す中で作者名表記を脱落させたのではなく、早い段階で作者名を脱落させたか、成立当初から『後拾遺集』六七九番歌には作者名がなかったと考えられる。『後拾遺集』からは和泉式部の作と知り難いこの歌を宸翰本がもつのは、やはり宸翰本と正集の資料の近さを物語るものである。宸翰本は正集E3歌群の全ての歌をもつわけではないが、部分的にE3歌群の欠脱を示しており、正集に劣らない資料的価値をも

つものであると言えよう。

三、宸翰本の構成と正集の歌（二）

順序が逆になったが、S11~40を見てみよう。一見して分かるように、宸翰本のこの部分に贈答歌はなく、題詠歌や連作歌で構成されることは既に指摘がある。S11~29は春夏秋冬恋の部立てに基づき、各部の末には「四月一日」「朝がほ」などの短い詞書の歌を挟むが、それぞれの始めには詞書をもたない歌が並び、これには正集冒頭の百首歌群を連想させるものがある。特に巻頭の二首は宸翰本・正集ともに同じ歌で、全く異なるこの二種類の和泉式部集は巻頭を一見しただけでは区別がつかない程である。

ただし、細かく読み進めると、S11~29は正集の百首歌群からの引用というものではない。「四月一日」と詞書のあるS9は、正集でも百首歌群の夏部一首目に位置し詞書をもたないが、宸翰本では詞書が付されている。他にS16・18・19も同様に、正集で百首歌群の歌に宸翰本で詞書が付けられているものがある。特にS19は、宸翰本では、

秋の暮れ

あきはて、いまはとかなしあさはらはら人のこゝろににたる

ものかな

(S19)

と秋の末に置かれるが、正集の百首歌群では冬部の歌である。ただ、この歌の語句から「秋の暮れ」を導き出すことは容易で、むしろこの一首だけを見る限り、冬より秋の暮れの方がふさわしいと思われる。宸翰本に入集させるにあたり季節を変更したことも考えられるところである。

「花のときこゝろしづかならず、といふことを」との詞書のあるS6は正集では百首歌群の歌ではない。和泉式部の宮廷での生活が綴られると思しき歌群の中に、

花の時心不静、雨の中に松緑をますといふこころを、

人のよむに

のどかなるをりこそなけれ花を思ふ心のうちに風はふかぬ

ど

(正450)

松はそのもとのいろだに有るものをすべてみどりもはるは

ことなり

(正451)

とある、この一首を用いている。百首歌群外からの採歌は他に、冬部冒頭歌S20、恋部の末にあるS29がある。

外山ふくあらしのかぜのおときけばまだきに冬のおくぞし
らる、

(S20 冬)

たちちねのいさめしものをつくぐとながむるをだにしる

人もなし

(S 29 恋)

この二首はいずれも正集では「親身岸額離根草 論命江頭不繫舟」との『和漢朗詠集』「無常」部に見える漢詩の訓を歌の頭に踏んだ一連の歌群に属す。しかし、S 20をこの題から離れ一首のみを独立させて見ると、無常観よりも冬の始めの歌として鑑賞されるものである。S 29も一首のみでは無常には直結し難い。これらの歌は宸翰本に組み込まれる際の判断により、一首として鑑賞する場合の歌の内容から各部に組み込んだものであると思われる。正集において百首歌群以外に見える歌も全て題詠・連作の歌からの採歌で、それらを歌の内容に則した題に組み込んでいく編集のあり方がここにかがえる。

続きを見てみよう。S 30～33は、

親のこゝろよからずおもひけるころ、いはほのなかに
もといふ歌お、くのかみごとにするて歌よみて、は、
のがりつかはし侍りしに

いにしへや物おもふ人をもどきけむむくひばかりのこ、ち

こそすれ

(S 30)

春雨のふるにつけては世の中のうきはあはれとおもひしら
る、

(S 31)

おしとおもふおりやありけむありふればいとかくばかりう

かりける身を

(S 32)

いかばかりふかき海とかなりぬらむちりの水だに山とつも
れば

(S 33)

とあり、宸翰本では一連の歌群からの抜粋のように見える。確かに正集433～444は「こころにもあらずあやしき事いできて、れいすむ所もさりてなげくを、おやもいみじうなげくと聞きていひやる、かみのもじはよのふるごとなり」との詞書もち、『古今集』雑下・九五二番の「いかならむいはほのなかに住まばかは世のうきことの聞え来ざらむ」の第二・三句「いはほのなかにすまばかは」を一首づつの頭に踏む歌群である。しかし、S 32・33は正集のこの歌群には含まれず、S 32は先程の正集「親身岸額…」の歌群、S 33は統集489～500「我不愛身命と云ふ心をかみにすゑて」とする一連の歌群の一首なのである。正集でこれら四首を見ればそれぞれ別の題をもって詠まれたものではあるが、いずれも一首の頭に歌句などの一文字ずつを踏んで一連の歌群とした箇所に含まれる。ここにはそうした歌をあえてまとめた、言いかえれば、採歌資料においてこの四首が一連のものであったのではなく、宸翰本への選入と編集の段階で、それぞれの題から切り離し、詠作方法・内容の類似によりここにまとめられたとは考えられないだろうか。

続くS 34～40は「つれづれなりしおり、よしなしごとにおほえしこと」をそれぞれ「世の中にあらまほしきこと」「人に定させまほしき事」「あやしきこと」の題により書き分けた歌で、正集336～353に同様の歌群が見え、歌もここにあるものばかりである。

こうして見ると、題詠歌の集合とされるS 1～40はほとんどが正集と重複し、正集でもやはり題詠として読まれるものばかりが集められていることがわかる。正集に見る題と一致しないものでも、贈答歌を題詠に仕立て直したものは見当たらない。そして、宸翰本へ選入するにあたっては、宸翰本における題と歌の内容との一致に意識した編集の方針が見て取れるのである。

残るS 67～80を見ておく。S 77～80は『和泉式部日記』との重複歌である。S 78は宸翰本前半部で唯一、帥宮つまり和泉式部以外の人物の歌を収めている。正集にも『和泉式部日記』の歌を集めた歌群が二箇所あるが、宸翰本のこの箇所はいずれか一方と一致することはなく、歌句の異同にも問題があり、その資料は正集か『和泉式部日記』か、また別の資料か不明と言わざるを得ない。S 67～76についても、S 76は正集には見えず詞書が正集198よりも『続詞花集』と酷似するのを除いて、続集に

重出があり、詞書も比較的近い。ただし、宸翰本と正集E3歌群に見たような歌序の一致はなく、S 68は、

法師のたうときをまうできて、あふぎをおとしたるに、つかはずとて
(S 68)

いとあつきころ、あふぎどもはらせて、外なるはらからど
ものがりやるとて
(続289)

と全く状況が異なる。さらに言えば、S 67の詞書や歌は続集422と内容は同じであるが、細かな語句を比較すると、榊原本続集や伝西行筆続集切よりも伝行成筆続集切により近い。しかし、所在が確認される伝行成筆続集切と宸翰本との重出歌は他にS 69のみであり、それ以上の比較はできない。よつて、S 67～80をそれまでに見た宸翰本と正集程の近さは確認できない。以上、宸翰本前半部分八十首のうち、半数のS 40までが題詠歌、残り半数が贈答歌を中心とした和泉式部の日常詠であり、八十首のうち六十六首が正集に見え、しかも正集からの採歌も考えうるものであることを確認した。

四、正集の歌群と宸翰本入集歌の分布

もう一度正集に戻ろう。現存正集は続集も含め集内に重複歌を多くもち、錯簡や欠脱も多いとされる、当初の形の明らかで

ないものである。多くの私家集が増補を繰り返して成長するの
ではあるが、正集・続集の場合はそれとは別に、幾つもの歌群
単位の小歌集が結び付き成立したとされている。正集を当初の
歌群単位に分けようとする試みは、清水文雄氏をはじめ多くの
先学により様々な視点を加えてなされてきた。それでもまだ正
集が十分に説明されたとは言えず、先に見たように細かな欠脱
等と思しき箇所はあるが、ひとまず久保木寿子氏の歌群分けに

従って進めていく。A (1-97)・B1 (98-111)・B2 (112-199)・
B3 (200-220)・B4 (221-267)・C (268-310)・D (311-391)・
日記歌 (868-893・392-421)・E1 (422-445)・E2 (456-615)・E3
(616-833)・E4 (834-867)との分類である。これに宸翰本の歌
の分布を重ねてみる。正集内に重出する場合で詞書などから一
方との関係が深いと判断されたもの、つまり、S42のようにE3
歌群にも正集211にも見える歌でE3に近いと判断されたものは、
もう一方(S42の場合の正集211)は数えない。すると、

I 宸翰本との重出歌がある歌群… A B2 C D E1 E2* E3
II 宸翰本との重出歌がない歌群… B1 B3* B4 E3*

となる。ただし、B4についてはIIに分類したが、『和泉式部日記』
との重出歌に関しては共通している。*を付したE2が宸翰本と
の重出歌をもつのはS6の一首のみであり、あるいは別資料か

らの採歌も考慮する必要があるかもしれない。B1 B4 E2が詞書の
あり方に共通性が指摘される場所でもある。*を付したB3と
E3、同じくE4とB2は正集内でそれぞれ重出歌が多いため、詞書
の近さ等からE3やB2をIに分類すればもう一方のB3やE4がIIと
なるのは半ば自然である。これを考慮して宸翰本と正集の重出
歌を重出歌の有無で見ると、比較的多くの歌群において宸翰本
との重出歌が見えることがわかる。

小歌群の集合体と考えられる正集ではあるが、宸翰本を編集
するにあたって正集のもととなった細かな歌群をそれぞれ個別
の撰集資料としたのであろうか。そう考えるよりも、細かな歌
群の集合体としてある程度まとまったものから、題詠歌などを
選び抜き出したと考えるのが妥当ではないか。その集合体とは、
現存正集と完全に同じではなかったにせよ、現存正集が損傷を
受ける前の形にまつまりつつあったものではなかったか。宸翰
本と正集との重出歌の多さは、本文の近さとともに資料の共通
性を物語っているのである。

五、まとめ

こうなると、宸翰本と正集の成立が気になるところである。
正集も宸翰本もその成立時期は不明な点が多いながら、正集の

成立は『千載集』から『新古今集』頃とする説がある。正集については伝定家筆とされる定家監督書写本の断簡が確認され、やはり遅くともそのあたりまでには成立していたはずである。

宸翰本前半部分については、後半が『新古今集』成立以降『新勅撰集』撰進までに増補されたと考えられるため、遅くともそれ以前には一度成立していたものと考えられている。加えて、先に見たように八十首のうち半分を題詠歌で占め、しかも、歌の内容と題との結び付きを意識する編集方針は、題詠が盛んになり主流を占めてゆく時代にあつて、そのあり方を模索していたからではないか。

さらに、S 40までの題詠歌に多く見える、正集の「親身岸額」歌群に属する歌々がある。正集では正268～310・正366～391に重出するこの歌群であるが、『金葉集』までは勅撰集に入集しない。ところが、『千載集』ではこの歌群から三首、次いで『新古今集』では五首もの歌が入集している。そして、宸翰本においても題詠歌四十首のうちに「親身岸額」歌群の歌が三首見える。特にS 20では冬部へ、S 29では恋部へと変更してまで入れているのは先に見たとおりである。実はS 20は『千載集』にも冬部・題不知として入集し、S 29は『新古今集』に雑下・題不知として入集する。宸翰本と『千載集』・『新古今集』の間

に直接関係の有無は明らかではないが、少なくとも共通して「親身岸額」歌群への関心が高いことは、このことから確認できるであろう。すると、宸翰本の成立もやはりこの時代に考えるのがよさそうである。つまり、正集の成立とも非常に近い時期に編集されたということになる。ついでながら、吉田幸一氏が宸翰本前半部分の編者を定家と推定されるのは未だ確証がないながら、時代としては近いということになる。また、陽明文庫所蔵本の識語に「以為相自筆之本令書写了」とある為相本の存在も、あるいは信用できるものであるかもしれない。

宸翰本はとかく軽視されがちではあるが、歌数こそ正集には劣るもののその成立は決して正集に比べて下がるというものはなく、相前後する平安末から遅くとも鎌倉ごく初期、秀歌選的に編集されたものと考えられる。そして、秀歌選でありながら、正集の欠脱をも示している。また、正集の諸本はわずかな古筆切を除き江戸期の写本ばかりであるのに対し、宸翰本諸本には系統を異にする三種の室町期写とされる本がある。書写年時の古さが本文の古さに直結するものではないが、宸翰本の性格をふまえた上で細かな本文の異同を検討してみる必要はあるだろう。

和泉式部正集・統集・宸翰本の歌番号および引用は、それぞれ『私家集大成 中古Ⅱ』和泉式部Ⅰ・Ⅱ・Ⅲによる。ただし、引用に際しては適宜句読点・濁点を付した。区別をするために宸翰本の歌番号には「S1」「S2」……とSを付した数字を用い、正集には「正集1」または「正1」、統集には「統集1」または「統1」と示す。

(1) 宸翰本諸本の書誌については、吉田幸一『和泉式部集定家本考』（古典文庫・1990年）に詳しい。

(2) 森田兼吉「宸翰本系和泉式部集の性格」（『日本文学論稿』1・1961年10月初出 『和泉式部日記論攷』1977年12月所収）、阿部方行「宸翰本系和泉式部集成成立攷」（『文学論藻』50・1975年12月）など。

(3) ただし、S107～S115はこの規則に外れる。ここは勅撰集恋部に題不知として入集するものを集めているとの指摘がある。

(4) 注(2) 引用の森田論文によりその可能性の指摘はあつたが、詳細な検討は、久保木寿子「和泉式部正集の形成に関する考察」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別

冊8・1982年3月）による。ここでいう正集E3歌群とは、正集616～833である。

(5) 注(2) 森田論文など。

(6) 榊原本は『日本古典文学影印叢刊9・榊原本私家集1』（1978年・貴重本刊行会）、彰考館甲本は『笠間影印叢刊75和泉式部集（正集）水府明德会彰考館文庫蔵』（1983年・笠間書院）に影印がある。

(7) 注(2) 阿部論文

(8) 佐伯梅友・村上治・小松登美著『和泉式部集全釈』（1959年・東寶書房）

(9) 注(4) 久保木論文、坂口和子「宸翰本和泉式部集について」（『大谷女子大國文』23・1993年3月）

(10) 注(4) 久保木論文。ただし、歌番号は私家集大成のものに改めた。

(11) 注(1) 吉田論文。

【付表】宸翰本歌番号と正・統集番号一覽および勅撰集入集状況

							秋			夏						春	
17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	宸
1 3 6	5 5	1 4 9	1 3 2	5 1	5 6	5 0	4 2	2 1	3 5	3 2	4 5 0		4	9	2	1	正・統集 内重出歌
8 6 1			8 6 0														重複歌
詞花 0 1 2 0	後拾遺 0 3 1 7		詞花 0 1 0 9	新古今 0 3 7 0	新古今 0 4 0 8	千載 0 2 4 7		後拾遺 0 1 6 5				後拾遺 0 1 4 8	後拾遺 0 0 5 7	後拾遺 0 0 4 8	後拾遺 0 0 3 5	後拾遺 0 0 1 3	勅撰集入集 ※

						連作				恋						冬		
36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18
3 4 0	3 3 7	3 3 6	続 4 9 2	2 9 3	4 4 4	4 3 3	2 8 6	9 3	8 6	8 5	1 7 0	1 6 3	7 9	7 3	7 2	3 0 1	6 2	5 7
				3 7 6			3 7 1				続 5 6 6	続 5 5 9				3 8 4		
	続後撰 0 0 8 5						新古今 1 8 1 2	後拾遺 0 8 0 2	後拾遺 0 7 5 5	新勅撰 0 9 5 5	詞花 0 1 5 8	金葉③ 0 2 8 5		新古今 0 7 0 2	後拾遺 0 3 9 0	後拾遺 0 4 1 4	千載 0 3 9 6	後拾遺 0 2 9 3

															雑					
55	54	53	52	51	50		49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	
6 7 7			統 6 0 2	1 6 1	6 5 4		1 8 4	6 5 1	6 4 8	1 5 2	6 3 9	6 3 3	6 2 5	6 1 9	統 3 3 0	3 4 6	3 4 5	3 4 2	3 4 1	
2 6 1				統 2 3 5			統 4 3 6					統 0 0 4		2 1 1						
詞花 0 3 2 6		後拾遺 0 8 1 7		後拾遺 0 5 3 9				後拾遺 0 6 7 9 (相模)	後拾遺 0 7 4 5	後拾遺 1 0 0 8	後拾遺 1 0 0 7	後拾遺 0 7 0 3	後拾遺 0 9 2 0		詞花 0 2 5 4					

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	
統 3 6 0	統 0 0 9	2 4 8	2 1 6	統 5 5 4	統 4 7 4	統 4 7 2	1 7 9	統 4 2 2	8 3 4	7 6 4	7 5 6	7 4 6	7 4 4	2 4 1	7 2 3	7 0 6	7 0 0	6 9 0	6 7 8	
		統 2 8 0	統 2 7 0				統 2 8 9		1 5 0											
	新古今 1 0 2 3		統後撰 0 9 4 9				後拾遺 1 2 1 0	新古今 1 8 1 1	拾遺 1 3 4 2		後拾遺 0 2 9 9	後拾遺 0 9 2 4	後拾遺 0 7 6 3		後拾遺 0 9 0 9				後拾遺 0 6 9 1	

95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76
3 6 5	3 6 4	2 7 5	2 9 0		2 9 5	続 1 6 0	1 0 0	続 2 1 5		続 5 7 5	4 8 0	続 1 4 5		4 7 5	8 9 2	2 2 2	2 2 1	2 2 8	1 9 8
					3 7 8											8 7 9			
新 古 今 1 8 2 1	新 古 今 1 8 2 0	新 古 今 1 7 1 6	新 古 今 1 7 3 8	新 古 今 1 6 4 0	新 古 今 1 5 2 9	新 古 今 1 4 9 5	新 古 今 1 4 5 9	新 古 今 1 4 0 2	新 古 今 1 3 4 4	新 古 今 1 1 8 7	新 古 今 0 8 1 6	新 古 今 0 7 8 3	新 古 今 0 7 7 6	新 古 今 0 7 7 5					後 拾 遺 被 除 歌 続 詞 花

115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	
	1 6 2	3 0 0	続 2 7 2		7 1 9	3 4	9 7	6 9 2		続 2 0 8	2 0 7	続 2 3 8	7 6	続 2 1 3	続 0 4 1	続 0 5 1	続 0 5 3	4 7 6	6 7 2	
	続 2 1 2	3 8 3									6 6 3									
千 載 0 9 8 6	千 載 0 9 0 6	千 載 0 8 4 4	千 載 0 8 4 1	千 載 0 8 4 0	詞 花 0 2 4 9	後 拾 遺 0 8 2 0	後 拾 遺 0 7 9 0	後 拾 遺 0 8 0 0	後 拾 遺 0 8 3 1	後 拾 遺 0 7 5 7	後 拾 遺 0 7 1 1	後 拾 遺 0 6 8 1	後 拾 遺 0 6 3 5	後 拾 遺 0 6 1 1	後 拾 遺 0 5 7 5	後 拾 遺 0 5 7 4	後 拾 遺 0 5 7 3	後 拾 遺 0 5 6 8	後 拾 遺 0 5 0 9	

134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	
8 3 1	5 7 4		6 7 9		7 8 5	7 4 7	8 3 8			続 2 0 1	1 7 3		7 6 6	続 2 3 0			7 7 0	続 4 6 4	
											続 5 7 0								
詞花 0 3 2 0	詞花 0 3 1 2	詞花 0 3 1 1	詞花 0 3 1 0	詞花 0 2 6 9	詞花 0 2 5 0	詞花 0 2 3 9 金葉③ 0 3 4 0	詞花 0 1 7 3	後拾遺 1 1 6 3	後拾遺 1 1 6 2	後拾遺 1 1 4 2	後拾遺 1 0 9 5	後拾遺 1 0 0 0	後拾遺 0 9 6 8	後拾遺 0 9 1 9	後拾遺 0 9 1 2	後拾遺 0 9 1 1	後拾遺 0 9 1 0	後拾遺 0 7 9 9	

150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138	137	136	135					
			5 3 6		4 4 2	2 2 6	4 2 8	8 6 9	続 0 5 6	1 8 3	続 2 4 0	続 2 2 2	続 0 1 4	3 5 5						
										8 4 0										
		金葉③ 0 6 5 0	金葉③ 0 6 3 6	金葉③ 0 6 1 2	金葉③ 0 5 4 6	千載 1 0 5 7	千載 0 9 6 8	千載 0 9 5 8	千載 0 8 4 3	千載 0 5 4 8	千載 0 4 9 0	千載 0 5 0 3	千載 0 0 3 3	続詞花 0 5 9 9	詞花 0 3 5 7	詞花 0 3 3 3				

※勅撰集入集欄は、続後撰集までの勅撰集と続詞花集についてのみ記した。

(きしもと りえ／本学大学院生)